

評価日:平成26年3月28日(金)13:30~16:30

評価者:鈴木美恵子(元独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター看護部長)

評価項目	コメント
I 教育理念・教育目的	<p>設置主体の「掖済」の精神を生かした教育理念・目的が明文化されており、法との整合性もある。さらに今回の自己点検で、「具体的な説明がないため、学生にとっては理解し活用することが困難かもしれない」と気づき、現在すでに補足説明文が作成され、来年度から学生便覧に掲載の予定である。</p> <p>卒業時点においてもつべき資質についても、理念に明示されている。</p> <p>学生観については、新規に開校した学校であったため、当時は一般論にとどまり、自校の学生観は明らかにされていない。しかし4年間の教育実践をしてきた今、全職員が学生をどう受け止めているか確認し合うことで、学生の実態に見合った教育方法の検討が出来るようになると、期待している。</p>
II 教育目標	<p>教育目標は教育理念・教育目的と一貫性がある。教育目標の1.に掲げられた目標から、いかに「人づくり」を大切にしようとしている学校かがわかる。</p> <p>教育目標は、さらに「卒業生の特性」として具体化し、卒業までの到達レベルを3段階に分けたレベル目標を明示し、そのための関連科目や教育内容についても位置づけられている。レベル目標は、学年別目標としても明示され、学生と教員が当面1年間で目指す共通の目標となっている。</p> <p>ただ、「卒業生の特性」は、卒業時までには到達すべきことと、卒業生として卒業後に継続的に成長して行くものが混在しているように思われるので、その辺りを明確にされたら、より活用しやすく評価しやすい目標になると考えられる。</p>
III 教育課程経営	<p>上記教育目標達成に向けて、会議での検討を繰り返しながら、教育課程編成を行った。カリキュラム構造図やカリキュラムデザインで3年間の学びの考え方や順序性が明示されている。科目目標達成に向け、単元間の重複や関連性も考慮し単元を構成している。</p> <p>基礎科目がすべて1年次に組まれていることや、科目立てが適切かなどの判断は、毎年学生の成長を評価することで、必要になるかもしれない。しかし具体的な根拠をもって構築されているため、評価はしやすいのではないかと考える</p> <p>単位履修についても学生に明示されており、履修を支援するものとなっている。</p> <p>単位認定基準に則って認定されているが、特に基礎看護技術試験については、できるようになるまで何度もチャンス进行を設けるなど、個々の学生の能力に合わせ、「ここまでは絶対到達させる」という、強い教育への姿勢が感じられる。</p> <p>学生による授業評価はすべての科目に導入されている。各担当講師は授業評価結果から自己評価を行い、次回の授業に生かしている。しかし、データ管理方法や評価結果の活用に関する倫理規定は明確になっていないので、今後の課題である。</p> <p>教員が自己研鑽できる体制づくりは、専門領域を担当し、授業負担もできるだけ過不足のないよう時間配分をするよう努力がされているが、時間が均等になることが平等ではない。教員間で不平不満の原因にならないよう、アンバランスな時ほど、きちんと説明が必要である。学会や研修への参加機会も計画的に実施されている。</p> <p>また、時には公開授業をもとに授業研究(意見交換)を行うなど、教員間で切磋琢磨することが当たり前になるようになってほしい。</p> <p>実習施設の学校に対する理解や協力体制は、学校側から相談したり、意見を聞いたりして、関心を持ってもらうことが不可欠である。学生の授業(実習)評価結果をうまく活用することも大切。その場合、良い指導によりこんな風に学生が成長したという実例を示すことが効果的である。また卒業後の活動状況の調査などで、実習指導者に共同研究者として参加してもらうことも、看護教育を理解してもらうために有効である。</p>

<p>IV 教授・学習・ 評価過程</p>	<p>理念・目的・目標と教育課程・教育内容の考え方は一貫しており、授業内容のまとまりは看護学の教育内容として妥当である。ただ、関連科目による重複や整合性、発展性については、十分な確認が出来ていない。異なる科目で内容が重複していても、重要性の認識につなげることができる。授業内容を分析し、同じ教育内容が科目間で反目し、学生を迷わせていないかだけはきちんとチェックが必要である。講師が「〇〇の授業でも聞いているが」とつけ加えれば、学生は関連しているものとして認識でき、深化させたり、発展させることが出来る。シラバスの各科目間の関連を分析し、関係講師への伝達をすることが必要である。</p> <p>また、看護技術の演習など、複数の教員が関わる授業では、事前に打ち合わせをするなどの協力体制が出来ている。</p> <p>評価は評価基準に従い適正に行われている。しかし、評価結果をどのように活用するかまではまだ不十分である。学生が活用しさらなる学習効果を得るよう、また教員が活用し、有意義な授業への工夫に繋がるよう、評価の重要性を再認識し、検討する。</p>
<p>V 経営・ 管理過程</p>	<p>まだ開校して丸4年であり、設置時に教育理念・教育目的から管理者の考え方は明らかにされ、それに基づいて建物・設備も教材整備等への財政基盤も組織体制も整えられてきたのであり、経営・管理上に問題はない。ただ、教職員の任用の考え方は、教育実践に大きく影響するので、明らかにしておく必要がある。</p> <p>学生の学習支援も、奨学金の説明や心身の健康管理など、カウンセラーを置き対応されている。</p> <p>保護者との連携・支援も行われ、広報を活用し学校の存在もPRしている。</p> <p>学校の将来構想は開校して間もないため、明確にされていないようであるが、「看護学校教育の今後の在り方」に対する国の方針とも考え合わせ、長期的・短期的な方向性の考え方は明らかにしておきたい。</p> <p>自己点検・自己評価は、今年度初めて実施された。学校職員全員で組織的に取り組み、職員は実施の意味も目的も十分理解されている。結果の公表は、来年度早々に実施される予定である。</p>
<p>VI 入学</p>	<p>入学者を得るための募集活動は積極的に行われている。選抜方法も入学試験規定に則り適正に実施されており、公平性・妥当性の検証を行っている。</p>
<p>VII 卒業・進学・ 就職</p>	<p>卒業生の輩出は今年度が2回目である。1回生における卒業時の学生の意見聴取はされていなかったが、今年度の卒業生にはアンケート調査を行っている。早急に分析し、カリキュラム評価のデータとして活用してほしい。</p> <p>また、1回生は1名を除いてすべて母体病院に就職しているため、卒業後の追跡はしやすい環境にあったが行っていなかったため、今年度の卒業生から追跡調査を予定されている。その結果は、掲げている「卒業生の特性」の判断に生かしてほしい。</p>
<p>VIII 地域社会/ 国際交流</p>	<p>地域的に工場が多く、住民との関わりが少ない事情もあるが、母体病院との関連からでもいいので、ボランティア的にでも地域に参画できる機会を作れたらよいと考える。しかし、学校の式典には町内会会長を招待し毎年参加されていることから、学校を理解していただく機会になっており、今後の糸口にできそうである。</p> <p>国際交流については、授業の中で触れてはいるが、積極的に交流できる機会とはなっていない。将来的に対応できる体制づくりは必要である。</p>
<p>IX 研究</p>	<p>新設校であり、日々の教育活動に精一杯で、まだ研究に取り組むゆとりがない様子。しかし、研究費は確保されており、研修や学会にも計画的に出されていることから、教員の意識次第で取り組めるようになっていくと考える。</p> <p>まずは、教員全員が自分の専門領域または看護教育学会の学会員になり、研究を身近なものと捉えられるようになってほしい。そして、日常的に迷ったり、悩んだり、良い工夫が出来たことなど、些細なことからも問題意識もち、意図的に原因究明していく姿勢を身につけてほしい。卒業生が就職先でどのように成長しているのか、臨床と合同で調査することから始めてもいい。研究結果が即、日常の教育に生かせる材料はたくさんある筈なので、教員間で刺激しあい、協力し合って、教員としてのやりがいにつながる研究活動を期待している。</p>